表14: 脱法ドラッグ関連障害患者の併存精神障害(ICD-10)

	n				脱法ドラッグの種類			
					脱法ハーブ単独群	パウダー・リキッド単独群	混合群	合計
併存障害	71	F0	症状性を含む器質性精神障害	度数	2	0	0	2
				%	5.1%	.0%	.0%	2.8%
		F2	統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害	度数	6	0	0	6
				%	15.4%	.0%	.0%	8.5%
		F3	気分障害	度数	12	3	2	17
				%	30.8%	21.4%	11.1%	23.9%
		F4	神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害	度数	4	4	4	12
				%	10.3%	28.6%	22.2%	16.9%
		F5	生理的障害及び身体的要因に関連した精神障害	度数	1	1	1	3
				%	2.6%	7.1%	5.6%	4.2%
		F6	成人の人格及び行動の障害	度数	6	4	5	15
				%	15.4%	28.6%	27.8%	21.1%
		F7	知的障害(精神遅滞)	度数	4	0	1	5
				%	10.3%	.0%	5.6%	7.0%
		F8	心理的発達の障害	度数	4	0	1	5
				%	10.3%	.0%	5.6%	7.0%
		F9	小児期及び青年期に通常発症する行動及び情緒の障害**	度数	0	0	4	4
				%	.0%	.0%	22.2%	5.6%
			その他	度数	7	3	1	11
				%	17.9%	21.4%	5.6%	15.5%

** $P<0.01$ (Pearson's χ^2 test)

表15: 脱法ドラッグ関連障害患者の精神症状 (n=122)

精神症状の内容		脱法ドラッグの種類 脱法ハーブ単独群	パウダー・リキッド単独群	混合群	合計
昏睡	度数	4	0	1	5
	%	6.5%	0.0%	2.8%	4.1%
昏迷	度数	4	1	0	5
	%	6.5%	4.2%	0.0%	4.1%
傾眠	度数	5	0	6	11
	%	8.1%	0.0%	16.7%	9.0%
せん妄	度数	16	3	7	26
	%	25.8%	12.5%	19.4%	21.3%
知覚変容**	度数	10	6	18	34
	%	16.1%	25.0%	50.0%	27.9%
幻視	度数	20	11	14	45
	%	32.3%	45.8%	38.9%	36.9%
幻聴	度数	22	12	17	51
	%	35.5%	50.0%	47.2%	41.8%
幻触	度数	4	0	2	6
	%	6.5%	0.0%	5.6%	4.9%
幻臭	度数	2	2	1	5
	%	3.2%	8.3%	2.8%	4.1%
幻味	度数	2	0	2	4
	%	3.2%	0.0%	5.6%	3.3%
他の幻覚	度数	1	1	0	2
	%	1.6%	4.2%	0.0%	1.6%
他の知覚異常	度数	1	0	2	3
	%	1.6%	0.0%	5.6%	2.5%
高揚感*	度数	34	8	26	68
	%	54.8%	33.3%	72.2%	55.7%
易刺激性・易怒性亢進	度数	29	12	23	64
	%	46.8%	50.0%	63.9%	52.5%
多弁・多動・過活動	度数	23	5	17	45
	%	37.1%	20.8%	47.2%	36.9%
抑うつ気分	度数	5	2	3	10
	%	8.1%	8.3%	8.3%	8.2%
意欲低下	度数	4	1	2	7
	%	6.5%	4.2%	5.6%	5.7%
虚無感・希死念慮	度数	6	2	1	9
	%	9.7%	8.3%	2.8%	7.4%
不安・焦燥感	度数	15	5	6	26
	%	24.2%	20.8%	16.7%	21.3%
その他の気分の異常	度数	0	0	0	0
	%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

精神症状の内容		脱法ドラッグの種類 脱法ハーブ単独群	パウダー・リキッド単独群	混合群	合計
誇大妄想	度数	0	0	0	0
	%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
被害妄想	度数	3	0	1	4
	%	4.8%	0.0%	2.8%	3.3%
注察妄想	度数	6	0	1	7
	%	9.7%	0.0%	2.8%	5.7%
関係妄想	度数	3	0	0	3
	%	4.8%	0.0%	0.0%	2.5%
罪業妄想	度数	0	0	1	1
	%	0.0%	0.0%	2.8%	0.8%
宗教妄想	度数	4	0	0	4
	%	6.5%	0.0%	0.0%	3.3%
他の妄想	度数	6	3	5	14
	%	9.7%	12.5%	13.9%	11.5%
連合弛緩	度数	0	0	0	0
	%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
支離滅裂	度数	0	1	1	2
	%	0.0%	4.2%	2.8%	1.6%
作為体験	度数	0	0	0	0
	%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
その他の思考の異常	度数	0	0	0	0
	%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
けいれん	度数	1	0	0	1
	%	1.6%	0.0%	0.0%	0.8%
運動失調	度数	5	0	3	8
	%	8.1%	0.0%	8.3%	6.6%
四肢麻痺脱力	度数	7	3	2	12
	%	11.3%	12.5%	5.6%	9.8%
他の神経症状*	度数	2	0	5	7
	%	3.2%	0.0%	13.9%	5.7%
自傷自殺	度数	7	5	6	18
	%	11.3%	20.8%	16.7%	14.8%
対人的暴力	度数	9	3	7	19
	%	14.5%	12.5%	19.4%	15.6%
対物的暴力	度数	5	1	4	10
	%	8.1%	4.2%	11.1%	8.2%
危険な自動車等の運転	度数	8	5	5	18
	%	12.9%	20.8%	13.9%	14.8%
他の問題行動	度数	1	0	1	2
	%	1.6%	0.0%	2.8%	1.6%

* P<0.05, ** P<0.01 (Pearson's χ^2 test)

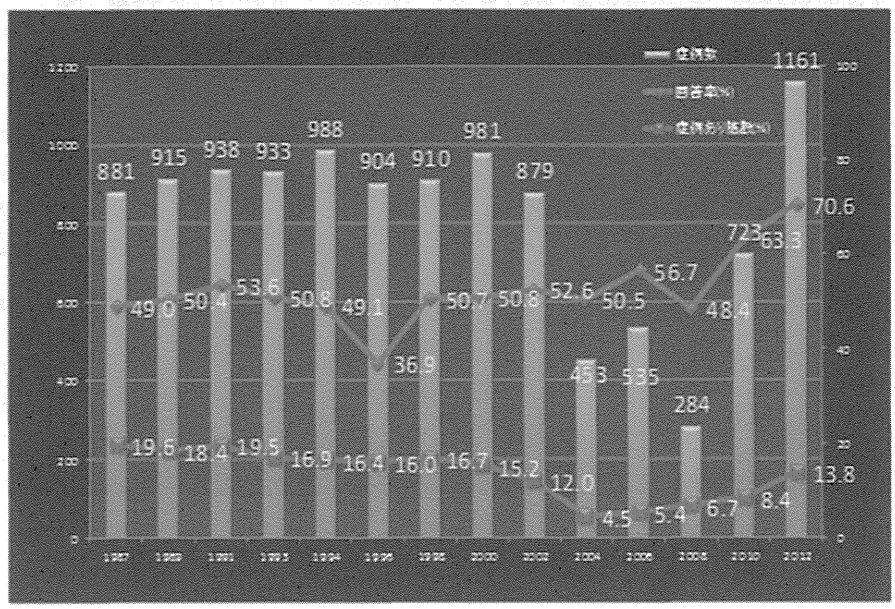

図1：症例数・回答率・症例あり施設の推移

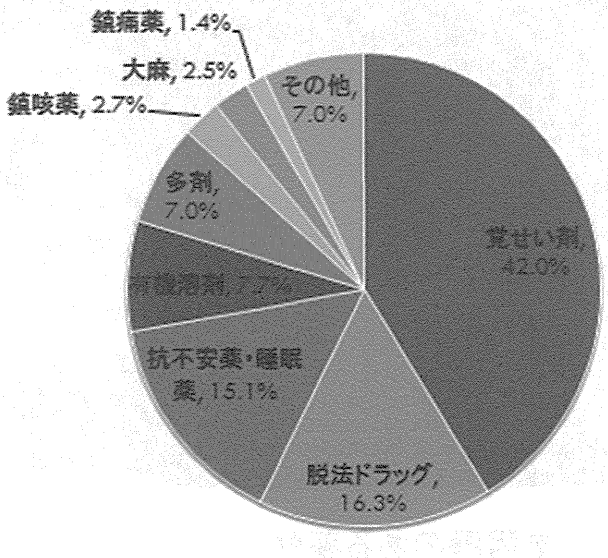

図2：主たる乱用薬物の比率（N=848）

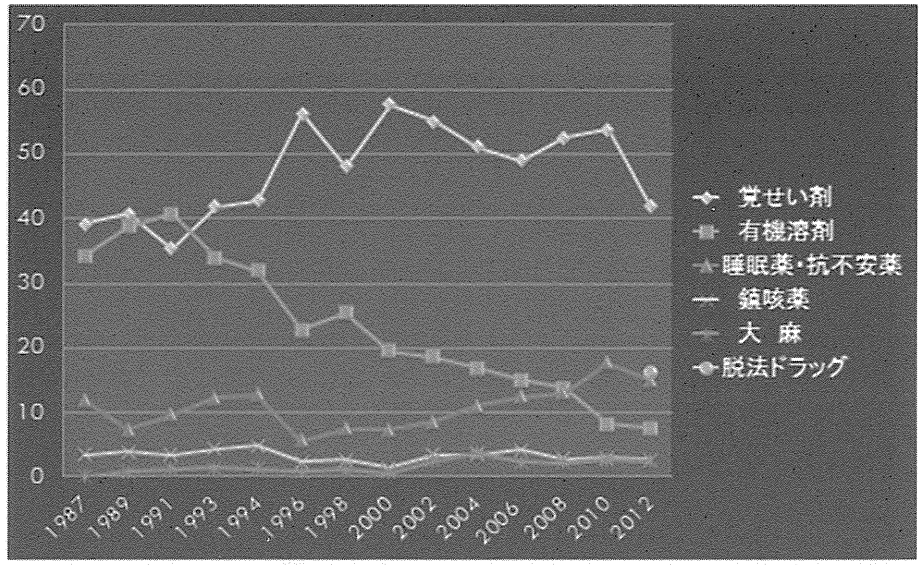

図3: 主たる薬物別にみた症例(%)の推移

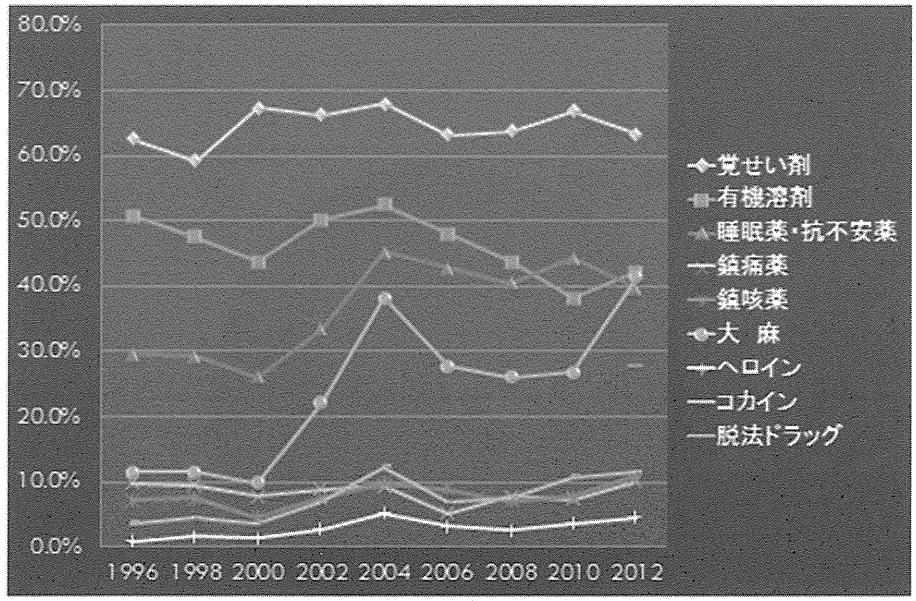

図4: 使用歴のある薬物(%)の推移

巻末資料（調査票）

1）生物学的性別　　1.男　2.女　3.その他

2）調査時年齢　　1.満（　　）歳　99.不明

3）最終学歴　　1.小学校　2.中学校　3.高校　4.専門学校　5.短大　6.大学　99.不明

4）職　歴　　1.乱用前職業（　　，99.不明）　2.現在の職業（　　，99.不明）

（下記のコード番号を記入。【例】主婦:29，無職:31，“暴力団員”の場合は「31.無職」を含め日常的業種を選択）

01. 農林漁業　02. 商人（卸・小売り）　03. 不動産業　04. 金融業　05. 自営の職人　06. 露天・行商　07. その他の自営業
08. 団体役員 09. 会社員　10. 店員　11. 工員　12. 公務員　13. 風俗営業関係者　14. 風俗営業以外の飲食業関係者
15. 興業関係者　16. 旅館業関係者　17. 交通運輸業関係者　18. 土木建築業関係者　19. 日雇い労働者　20. その他の被雇用者　21. 医療薬業関係　22. 芸能関係　23. 船員　24. 小学生　25. 中学生　26. 高校生　27. 大学生　28. 各種学校生
29. 主婦　30. 家事手伝い　31. 無職　32. 不定　33.その他

5）反社会的な交友関係（複数選択可）

①暴力団員との関係　　0.なし　1.あり　99.不明
②非行ｸﾞﾙｰﾌﾟとの関係　　0.なし　1.あり　99.不明
③薬物乱用者との関係　　0 なし　1.あり　99.不明

6）補導・逮捕歴（複数選択可）　0.なし　1.薬事法関連であり　2.薬事法以外であり　99.不明

7）刑事・矯正施設入所歴　0. .なし 1. あり【①鑑別所 ②少年院 ③留置場 ④拘置所 ⑤刑務所 ⑥その他（　　）】 99. 不明

8）現在の配偶関係　1.未婚 2.同棲 3.内縁 4.既婚 5.別居 6.離婚 7.死別 8.再婚 9.その他（　　）
99.不明

9）現在のアルコール問題　0.なし　1.あり【①問題飲酒レベル ②依存レベル ③程度は不明】　99.不明

10）これまでのすべての薬物使用歴について以下の表の該当する箇所（「あり」もしくは「なし」）に「○」を記入して下さい。 ただし治療で用いた薬物は除きます。

使用経験のある薬物	これまで		過去１年間	
1. 覚せい剤	あり	なし	あり	なし
2. 揮発性溶剤	あり	なし	あり	なし
3. 大麻	あり	なし	あり	なし
4. コカイン	あり	なし	あり	なし
5. ヘロイン	あり	なし	あり	なし
6. MDMA	あり	なし	あり	なし
7. MDMA 以外の催幻覚（LSD、ケタミン、5-Meo-DITP	あり	なし	あり	なし
8. いわゆる「脱法ドラッグ」（ハーブ、リキッド	あり	なし	あり	なし
9. 睡眠薬	あり	なし	あり	なし
睡眠薬の具体的名称：				

10. 抗不安薬	あり	なし	あり	なし
抗不安薬の具体的名称:				
11. 鎮痛薬	あり	なし	あり	なし
12. 鎮咳薬	あり	なし	あり	なし
13. リタリン	あり	なし	あり	なし
14. その他 （薬剤名	あり	なし	あり	なし

11)はじめて使用した薬物は何ですか？ 1つだけ選択してください。
(＊処方薬・医薬品については，治療目的以外の使用(=乱用)とします。)

1.覚せい剤 2.有機溶剤 3.大麻 4.コカイン 5.ヘロイン 6.MDMA(ｴｸｽﾀｼｰ) 7MDMA 以外の催幻覚薬
8.いわゆる「脱法ドラッグ」(ハーブ、リキッドなど) 9.睡眠薬 10.抗不安薬 11.鎮痛薬 12.鎮咳薬
13.リタリン 14.その他( ) 99.不明

12)初回使用薬物("質問11)"の薬物)を使用するきっかけとなった人物は次のうち誰でしたか？(複数選択可)

1.なし(自発的使用) 2.配偶者 3.同棲中の相手 4.恋人・愛人 5.同性の友人 6.異性の友人 7.知人
8.医師(精神科) 9.医師(身体科) 10.医師(精神科・身体科両方) 11.薬剤師 12.親 13.同胞
14.密売人 15.その他( ) 99. 不明

13)調査時点における「主たる薬物」(＝現在の精神科的症状に関して臨床的に最も関連が深いと思われる薬物)を1つ選択して下さい。(複数の薬物が同程度に関与していると考えられる場合は，16.多剤して下さい。)

1.覚せい剤 2.有機溶剤 3.大麻 4.コカイン 5.ヘロイン 6.MDMA(ｴｸｽﾀｼｰ) 7MDMA 以外の催幻覚薬
8.いわゆる「脱法ドラッグ」(ハーブ、リキッドなど) 9.睡眠薬 10.抗不安薬 11.鎮痛薬 12.鎮咳薬
13.リタリン 14.その他( ) 15. 多剤 99.不明

14)主たる薬物("質問13)"の薬物)を使用しつづけた理由は次のうちどれでしたか？(複数選択可)

1.誘われて 2.刺激を求めて 3.好奇心・興味から 4.断りきれずに 5.自暴自棄になって
6.覚醒効果を求めて 7.疲労の軽減 8.性的効果を求めて 9.ストレス解消 10.抑うつ気分の軽減
11.不安の軽減 12.不眠の軽減 13.疼痛の軽減 14.咳嗽の軽減 15.やせるため
16.その他( ) 99.不明

15)"質問14)"で選択した「主たる薬物」の最近1年間における主な入手経路は以下のうちどれですか？
(複数選択可)

1.最近1年間は使用していない 2.友人 3.知人 4.恋人・愛人 5.家族 6.密売人(日本人)
7.密売人(外国人) 8.医師(精神科) 9.医師(身体科) 10.医師(精神科・身体科両方) 11.薬局
12.インターネット 13.その他( ) 99.不明

16)"質問14)"で選択した「主たる薬物」について，現在，精神科的には以下のどの診断(ICD-10)に該当しますか。
該当する診断にすべてに○をつけて下さい。(複数選択可。)

ICD-10 診断分類	該当するものに○をつける
1. (F1x.0) 急性中毒	
2. (F1x.1) 有害な使用(心身の健康に害が起きているが，「依存症候群」は満たさないもの)	
3. (F1x.2) 依存症候群	
4. (F1x.3) 離脱状態	

5. （F1x.4） せん妄を伴う離脱状態（アルコール性振戦せん妄等）	
6. （F1x.5x） 精神病性障害	
7. （F1x.6） 健忘症候群	
8. （F1x.7） 残遺性障害（ﾌﾗｯｼｭﾊﾞｯｸ，気分・認知・人格障害等）・遅発性精神病性障害（使用後 2～6週の発症）	
9. （F1x.8） 他の精神および行動の障害	

17）今回の外来受診または入院に至る受診経路（紹介元）は以下のうちどれですか？（一つだけ選択）

1.自発的な受診
2.周囲のすすめ（家族、友人、知人、同僚など）
3.医療機関
4.保健福祉・行政機関（精神保健福祉センター、保健所、福祉事務所、精神科救急システムなど）
5.刑事司法機関（警察、検察庁、裁判所、保護観察所、弁護士、保護司など）
6.民間リハビリ施設・自助グループ
7.その他（　　）　　99.不明

18）現在併存している、物質関連障害以外の併存精神障害に関して、以下の枠内から該当するICD-10診断をお選びください。（複数選択可）

①F0：症状性を含む器質性精神障害　②F2：統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害
③F3：気分障害　④F4：神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害
⑤F5：生理的障害及び身体的要因に関連した精神障害　⑥F6：成人の人格及び行動の障害
⑦F7：知的障害（精神遅滞）　⑧F8：心理的発達の障害
⑨F9：小児期及び青年期に通常発症する行動及び情緒の障害
⑩その他（　　）

以下の質問は、“質問14）”で「主たる薬物」として、8. いわゆる「脱法ドラッグ」と回答した患者についてのみご回答ください。

19）いわゆる「脱法ドラッグ」の内容成分は不明な場合も少なくないですが、外観から以下のように分類することができます。この患者が使用していた「脱法ドラッグ」について、外観上の分類ごとに該当する項目に「○」をつけてください。

いわゆる「脱法ドラッグ」の外観による分類	これまで使用あり	過去1年間の使用あり	過去1ヶ月間の使用あり	使用方法（該当するものすべてに○をつける）						
				経口	静注	経気道的吸引	経鼻吸引	肛門注入	その他	不明
1. ハーブ系（植物様の外観）										
2. パウダー系（粉末状の外観）										
3. リキッド系（液体状の外観）										
4. その他（製品名　　）										

20)「脱法ハーブ」の使用に関連して出現した精神・神経症状について、それぞれ「急性（使用直後から出現し、1ヶ月以内に消失）」と「慢性（最終使用から1ヶ月経過後も持続）ごとに、該当するものすべてに○をつけてください

症状			急性	慢性				急性	慢性
意識障害	昏睡				思考の異常	思考内容の異常	誇大妄想		
	昏迷						被害妄想		
	傾眠						注察妄想		
	せん妄						関係妄想		
知覚の異常	知覚変容感						罪業妄想		
	幻覚	幻視					宗教妄想		
		幻聴					他の妄想		
		幻触				思考形式の異常	連合弛緩		
		幻嗅					支離滅裂		
		幻味				思考体験様	作為体験		
		他の幻覚				その他の思考の異常			
	その他の知覚の異常				神経学的異常	けいれん			
気分の異常	躁状態	高揚感				運動失調			
		易刺激性・易怒性亢				四肢の麻痺・脱力			
		多弁・多動・過活動				他の神経症状			
	うつ状	抑うつ気分			問題行動	自傷・自殺行動			
		意欲低下				対人的暴力			
		虚無感・希死念慮				対物的暴力			
		不安・焦燥感				危険な自動車等の運転			
	その他の気分の異常					他の問題行動			

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

分 担 研 究 報 告 書
(1－4)

平成24年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)
分担研究報告書

全国の児童自立支援施設における薬物乱用・依存の意識・実態に関する研究

分担研究者　庄司正実　　目白大学
研究協力者　富田　拓　　国立武蔵野学院
研究協力者　相澤　仁　　国立武蔵野学院

研究要旨　この研究の目的は，薬物乱用のハイリスク群である非行児の薬物への意識および実態を把握することである．この目的のため，全国の児童自立支援施設に入所中の児童に質問紙調査を実施した．有効調査人数は，973 人(男性 686 人，女性 287 人)であった．調査により以下のような結果が得られた：1)有機溶剤乱用者数は男 31 人(4.5%)女性 61 人(21.3%)，大麻乱用者数は男性 14 人(2.0%)女性 20 人(7.0%)，覚せい剤乱用者数は男性 5 人(0.7%)女性 13 人(4.5%)，ブタン乱用者数男性 69 人(10.1%)女性 47 人(16.4%)であった．その他，抗不安薬(安定剤)乱用が男性 31 人(4.5%)女性 45 人(15.7%)，ブロン(咳止め液)乱用が男性 16 人(2.3%)女性 27 人(4.2%)に認められた．従来の結果と同様にすべての薬物にて女性は男性より乱用頻度が高かった．また今回新たに調査対象薬物としたいわゆる脱法ハーブは男女それぞれ 25 人(3.6%)および 23 人(8.0%)に認められた．2)1994 年度からの薬物乱用頻度の変化は以下のとおりである．有機溶剤乱用はこれまでと同様に減少傾向を示した．特に男性においてこの傾向が著しく，1994 年 41.2%から 2006 年以降 10%前後に減少し今回は 4.5%となった．女性でも 1994 年 59.6%から 2006 年以降 30%となっていたが，今回さらに減少し 21.6%となった．覚せい剤乱用は男女とも 2000 年ころまでやや増加傾向にあったが，2002 年以降減少傾向を示しており，男性は 2006 年以降 1%以下で女性は 2008 年以降 10%以下となった．大麻乱用頻度について，男性は 4%から 5%前後であったが 2010 年は 1.9%今回 2.0%となり，一方女性では 1994 年(22.0%)および 1996 年(19.0%)はやや高かったが 1998 年から 14%から 15%台であったが今回初めて 7.0%と 10%以下となった．3)有機溶剤乱用に対する態度の年代変化を検討したところ，1998 年以降大きな変化は見られなかった．ことのことより近年の薬物乱用頻度の減少と児童の薬物乱用への態度はあまり関係がないと考えられた．一方，入所非行児の非行歴を検討した結果非行程度がやや軽度化している傾向が疑われた．

児童自立支援施設入所児童は薬物乱用のハイリスクグループである．今回の調査により児童の乱用薬物が従来のように有機溶剤中心ではなくなってきていることを示している．今後とも継続的に実態を把握していくことが必要である．

A 研究目的

われわれは，1994 年度より 2010 年度まで隔年ごとに児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用の実態を全国調査してきた[1)-8)]．その結果，有機溶剤乱用者は男女とも低下してきており特に男性における低下が顕著であるという結果が得られている．また，覚せい剤乱用は男女とも 2000 年ころまで増加傾向にあったが，2002 年以降減少傾向を示していた．大麻乱用頻度について男性は 4%から 5%前後であり女性では 1998 年以降は

12%から15%台であまり変化はなかった.

これら各種薬物の非行少年における乱用実態を継続的に把握することが本研究のおもな目的である.

児童自立支援施設入所非行児における薬物乱用の動態の変化は薬物乱用検挙少年者数動向と類似している.

警察庁統計によれば2011年に覚せい剤事犯で送致した少年は183人，有機溶剤等の乱用で送致した少年は100人で，大麻事犯で検挙した少年は81人であった[9]. 少年の薬物事犯のうちでは，有機溶剤乱用が依然として多いが，1990年代初めは2万人以上が有機溶剤乱用により検挙されており，その数は激減している.

このような検挙数の変化が，実際の非行臨床場面における薬物乱用に反映しているかどうかを把握することは非行臨床の実践にとっても重要である.

薬物乱用では実際に検挙されず暗数となっている乱用者が多く，特に入所女子非行児では依然薬物非行は重要な位置を占めており，非行児の実際の薬物乱用状況を知ることはどうしても必要である.

本調査では，2010年に引き続き児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用実態を調査することにより薬物乱用のハイリスク群である非行児の薬物乱用の動態を把握する. おもな調査対象薬物は，われわれの従来調査の結果と比較できることおよび他の調査研究や司法統計資料と比較検討できることより有機溶剤，大麻，覚せい剤，ブタンとしたが，その他の薬物についても簡単に乱用経験および周囲の乱用状況を尋ねる質問項目を追加した.

B 方法

1 対象

全国の57の児童自立支援施設入所児童. 児童自立支援施設に調査用紙を配布した. 回答が得られた施設は，47施設であった(施設回収率82.5%). 分析では性別の記載のなかった者を除いた. その結果最終的調査対象者数は973人(男性686人，女性287人)となった.

2 調査用紙

調査用紙は資料に示した. 調査が今後も同一施設に継続的に実施できるよう，なるべく被調査施設および被調査者の負担にならないように留意した.

調査項目は，薬物乱用関連項目，薬物以外の非行関連項目，性格検査項目，一般個人属性などである. 薬物乱用に関する質問項目は前回までとほぼ同じである(資料参照).

3 調査手続き

調査用紙は各施設に郵送し，施設ごと集団で実施してもらった. 終了後施設ごとに一括して返送してもらった. 回答は無記名式で，もし回答したくない場合は回答しなくても良い旨を質問紙に書き添えた.

C 結果

1 対象者の属性

対象者の，性・学年構成，性・年齢構成，施設入所期間，地域別人数，非行歴，初発非行年齢，家庭裁判所係属歴を表1から表7に示した.

性別にみると男性が686人で全体の70.5%を占めている. 就学状況は，中学3年生が男性302人(44.0%)，女性が141人(49.1%)と最も多い. 中学生が多いが，高校生および専門学校生が男性4.1%，女性4.5%であった. 中学卒業後で無職である者も男性2.3%，女性9.4%を占めている. そのほか小学生が男女それぞれ5.6，1.8%いた. 就労者は男女それぞれ0.1%，1.0%であった(表1). 年齢で見ると中学2年および3年に相当する14歳および15歳が男性でそれぞれ38.8%，26.1%，女性で40.1%，27.9%と多くを占めていた. 一方，

18 歳以上の者は男女それぞれ 1.0%，0.3%であった(表 2)．

施設入所期間は，入所初期の 3 ヶ月以下の者が男性 161 人(23.5%)，女性 72 人(25.1%)であった．一方，2 年以上入所している者は男性 64 人(9.3%)，女性 14 人(4.9%)いた(表 3)．

在住地は，施設の所在地により北海道・東北，関東，中部，関西，中国・四国，九州・沖縄に分けた．国立 2 施設については児童本人の居住地を確認していないため在住地不詳とした．最も人数の多かった地域は関東(男性 98 人，女性 45 人)であり，また調査対象数が最も少なかったのは九州（男性 98 人，女性 34 人)であった（表４）．

非行歴に関しては多いものから順に，男性では怠学 458 人(66.8%)，家出・外泊 426 人(62.1%)，窃盗 423 人(61.7%)，傷害 414 人(60.3%)，女性では怠学 232 人(80.8%)，家出・外泊 229 人(79.8%)，窃盗 185 人(64.5%)，自転車盗 179 人(62.4%)，不良交友 177 人(61.7%)などとなっている(表 5)．

初発非行年齢は，男女とも小学校 4 年から中学校 1 年が 10%台で多い．女性では全体に男性より初発非行がやや高い傾向にあり，女性では中学 2 年生と中学 3 年生の初発があわせて 9.4%を占めた(表６)．

家庭裁判所への係属歴は，性差はなく，男性 191 人(27.8%)，女性 65 人(22.6%)である(表７)．

2　薬物乱用の頻度

調査対象薬物は前回 2010 年調査と同じく有機溶剤，ブタン，大麻，覚せい剤，コカイン，睡眠薬，安定剤，咳止め液，MDMA，リタリンである．さらに近年問題とされ始めたいわゆる脱法ハーブも調査対象とした．非行児の薬物乱用は，女性に多いため，男女別に検討した．また，薬物への意識は，薬物乱用者と非乱用者で異なると予想されるので両者を分けて分析した．

1)　周囲の薬物乱用頻度(表 8)

少年達の交友関係など周囲に各種薬物乱用者がいるかどうか尋ねた．その結果，すべての薬物で女性は男性よりも周囲の薬物乱用頻度が高かった．

男性では，有機溶剤 123 人(17.9%)，ブタン 128 人(18.7%)，抗不安薬(安定剤)83 人(12.1%)，大麻 71 人(10.3%)，覚せい剤 55 人(8.0%)，咳止め液 53 人(7.7%)，コカイン 16 人(2.3%)，MDMA16 人(2.3%)，リタリン 11 人（1.6%），睡眠薬 5 人(0.7%)の順であった．

女性では有機溶剤 124 人(43.2%)，抗不安薬(安定剤)98 人(34.1%)，ブタン 94 人(32.8)，覚せい剤 90 人(31.4%)，大麻 78 人(27.2%)，咳止め液 76 人(26.5%)，コカイン 28 人(9.8%)，MDMA27 人(9.4%)，リタリン 18 人(6.3%)，睡眠薬 10 人(3.5%)の順であった．

いわゆる脱法ハーブ乱用は男女それぞれ 56 人(8.2%)60 人(20.9%)に見られた．

2)　本人の薬物乱用頻度(表 9)

本人の薬物乱用もすべての薬物において女性は男性より頻度が高かった．

男性では，乱用頻度が高い順に，ブタン 69 人(10.1%)，有機溶剤 31 人(4.5%)，安定剤 31 人(4.5%)，脱法ハーブ 25 人(3.6%)，咳止め液 16 人(2.3%)，大麻 14 人(2.0%)，ＭＤＭＡ7 人(1.0%)，覚せい剤 5 人(0.7%)，リタリンおよび睡眠薬が 3 人（0.4%）コカイン 2 人(0.3%)であった．

女性では，乱用頻度が高い順に，有機溶剤 61 人(21.3%)，ブタン 47 人(16.4%)，安定剤 45 人(15.7%)，咳止め液 27 人(4.2%)，脱法ハーブ 23 人(8.0%)大麻 20 人(7.0%)，覚せい剤 13 人(4.5%)，ＭＤＭＡ12 人(4.2%)，コカイン 7 人(2.4%)，睡眠薬・リタリン 8 人(2.5%)であった．

各薬物とも無回答者がいたため乱用頻度の少ない薬物では結果の信頼に問題がある．

3) **飲酒歴**(表 10, 表 11)

前回 2010 年調査より飲酒歴についても確認することとした．1 年に数回以上飲酒した者は，男性では 416 人(60.6%)女性では 220 人(76.7%)であった．飲酒頻度は男性では 1 年で数回とした者(139 人；20.3%)が多いが，女性ではほぼ毎日(69 人；24.0%)あるいは週に 2-3 回(73 人；25.4%)と回答した者で 50%以上をしめ，女性のほうが飲酒していた．飲酒開始年齢は，男女とも中学校 1 年生が 20%以上で最も多かった．

4) **喫煙歴**(表 11, 表 12)

喫煙歴についても前回より調査項目とした．喫煙歴は男性 417 人(60.8)%女性 212 人(73.9%)であり，女性のほうがやや頻度が高かった．喫煙は，飲酒と異なり経験者では使用頻度はほぼ毎日とする者が男女とももっとも多かった．男性の 286 人(41.7%)女性の 152 人(53.0%)が毎日喫煙をしていた．

5) **有機溶剤，大麻，覚せい剤の乱用頻度の年代変化**(表 14, 表 15)

有機溶剤，大麻，覚せい剤の乱用頻度について，1994 年から今回 2012 年調査までの隔年調査結果を表にまとめた．

有機溶剤乱用は，男性において一貫して減少しており 1994 年 41.2%から 2008 年には 10.7%となり，今回は 4.5%となった．女性有機溶剤乱用率は男性よりも減少率がゆるやかであったがやはり漸減し前回 2010 年 28.6%から今回 21.6%となった．

大麻は男性では 1994 年から 2008 年までほぼ４%から６%の範囲であったが，2010 年 1.9%今回 2012 年は 2.0%となり半減した．女性では 1998 年から 2008 年にかけて 14%から 15%台であったが前回 12.6%で今回 7.5%と減少した．

覚せい剤は男性では 1994 年 1.2%から 2000 年 5.0%まで増加したのち，2002 年 2.5%，2004 年 1.6%となり，2006 年は以降１%以下であり今回も 0.7%と少なかった．女性では 1994 年 6.6%から 1998 年 16.9%まで増加したが，2000 年 15.2%から 2006 年 10.9%へと低下傾向であり，2008 年以降は 10%以下が続き今回 2012 年は 4.5%に低下した．

6) **地域ごとの有機溶剤，大麻，覚せい剤の乱用頻度**（表 16, 表 17）

有機溶剤，大麻，覚せい剤，ブタンの各種薬物乱用頻度を地域ごとにみてみた．

男性では，有機溶剤や覚せい剤あるいはブタンは地域差はあまりないようであった．大麻は西日本方面でやや高い傾向にあった．

女性の場合，有機溶剤は関東が少なく大麻は関西が多い．覚せい剤は関西が少なかった．またブタンは九州が少なかった．

地域別の検討では，対象数が少なくなるので調査年度による変動が大きくなりやすく信頼性は低いと考えられる．

3 有機溶剤，大麻，覚せい剤乱用の意識・実態

1) 有機溶剤

① 周囲の有機溶剤乱用による精神症状発現者(表 18)

身近に有機溶剤乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた．

その結果，男性の 45 人(6.6%)，女性の 68 人(23.7%)が身近に有機溶剤乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた．女性に周囲の症状発現者が多かった．

② 有機溶剤乱用の誘い(表 19)

有機溶剤吸引を誘われたことがある者は，男性 62 人(9.0%)，女性 87 人(30.3%)であった．

③ 有機溶剤入手性（表 20)

有機溶剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた．

簡単に手に入るとしたものは，男性では 70 人（10.2%），女性では 84 人(30.3%)であり，女性の方が簡単に手に入るとした者が多かった．

④ 有機溶剤乱用開始年齢(表 21)

有機溶剤乱用開始年齢は，男女とも中学 1 年生あるいは中学 2 年生である 13 歳が最も多かった(男性 5 人(16.1%)，女性 18 人(29.5%))．続いて 14 歳，12 歳が開始年齢として多かった．

⑤ 有機溶剤吸引頻度(表 22)

有機溶剤を最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた．「今まで 1，2 回」が男女それぞれ 13 人(41.9%)，26 人(42.6%)と多かった．「ほとんど毎日」と回答した者は男女それぞれ 1 人(3.2%)，5 人(8.2%)であった．乱用頻度に性差はなかった．

⑥ 有機溶剤乱用への法律知識(表 23)

乱用者に対して，有機溶剤乱用が法律で禁止されていることを知っているかどうか尋ねた．その結果，知っていた者は男性 25 人（80.6%），女性では 53 人(86.9%)でありほとんどの乱用者は禁止されていることを知っていた．

⑦ 有機溶剤乱用への態度(表 24,25)

この項目は，男女ごとに有機溶剤乱用経験別に比較した．有機溶剤乱用に対して，「法律で禁じられているから，すべきではないと思う」，「法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う」，「法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う」の 3 件法で回答してもらった．

「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と遵法的に答えた者は，有機溶剤非乱用者では男性 452 人(70.6%)，女性 124 人（57.1%）だったのに対し，有機溶剤乱用者では男性 12 人(38.7%)，女性 14 人(23.0%)と少なかった．

一方．「少々ならかまわないと思う」，「法律を守る必要は全然ないと思う」という許容的回答をした者は，乱用者では男性 19 人（61.3%）および女性 45 人（73.8%）と多く，一方，非乱用者では男性 78 人(12.2%)および女性 66 人（30.4%）と少なかった．

以上、男女とも乱用者は有機溶剤乱用に許容的であった．

⑧ 有機溶剤乱用禁止への態度(表 26,27)

法律で有機溶剤乱用を禁止していること自体への意見を尋ねた．「禁止することを当然」としているのは非乱用者では男女それぞれ 372 人（58.1%），105 人(48.4%)であったのに対し，有機溶剤乱用者では「禁止することを当然」とした者は男女それぞれ 9 人(29.0%)，12 人(19.7%)にすぎなかった．「有機溶剤くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよい」を合わせた有機溶剤乱用に肯定的意見が，有機溶剤乱用者では，男女それぞれ 10 人(32.2%)，35 人(57.4%)あり，非乱用者よりも多かった．

⑨ 有機溶剤の有害性知識（表 28、29)

有機溶剤乱用の影響として，急性中毒死，多発神経炎，精神病状態，無動機症候群，フラッシュバックについて尋ねた．

これらの有害性については，精神病状態およびフラッシュバックが有機溶剤乱用の有無にかかわらず男女とも良く知られていた．精神病状態が生じることを知っていた者は，男性では乱用者 23 人(74.2%)非乱用者 337 人(52.7%)，女性では乱用者 45 人(73.8%)非乱用者 155 人(71.4%)であった．また，乱用者・非乱用者とも女性の方が男性よりも有害性知識がある傾向にあった．

⑩ 有機溶剤で体験した症状(乱用者)(表 30)

有機溶剤による症状としては精神病状態が男性乱用者 4 人(12.9%)，女性乱用者 14 人(23.0%)に訴えられていた．フラッシュバックも男性乱用者 4 人(12.9%)，女性乱用者 17 人(27.9%)に見られた．無動機症候群や多発神経炎の症状も尋ねているが，これらは本人の訴えであるので正確な診断ではない．

⑪ 有機溶剤の有害性知識と乱用抑止(表 31)

有機溶剤乱用の有害性の知識が有機溶剤乱用を抑止するかどうかを有機溶剤乱用者に尋ねた．「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性乱用者では 9 人(29.0%)，女性乱用者では 10 人(16.4%)であった．一方，「やはりしていたと思う」は男女乱用者それぞれ 9 人(29.0%)，34 人(55.7%)であった．

⑫ 施設退所後，乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者のみ)(表 32)

今回施設を退所した後有機溶剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた．その結果，「絶対やらないと思う」は男女それぞれ 22 人(71.0%)，36 人(59.0%)であった．一方，「多分やると思う」と答えた者は男性では 3 人(9.7%)，女性では 10 人(16.4%)であった．，0 人(0.0%)と少なかった．「絶対やると思う」と答えた者は男女ともいなかった．

⑬ 退所後，乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表 33)

上記退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた(重複回答あり)．男性では「誘われたらやると思うから」「いやなことがあったらやると思うから」「なんとなくそう思うから」が 2 人いた．女性では「誘われたらやると思うから」とした者が 9 人(90.0%)，「なんとなくそう思うから」が 7 人(70.0%)いた．「今もやりたいと思っているから」が 3 人(30.0%)，「いやなことがあったらやると思うから」が 3 人(30.0%)いた．

2) ブタン乱用

① 周囲のブタン乱用による精神症状発現者(表 34)

身近にブタン乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた．

その結果，男性の 46 人(6.7%)，女性の 43 人(15.0%)が身近にブタン乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた．女性に周囲のブタンによる症状発現者が多かった．

② ブタン乱用の誘い(表 35)

ブタン乱用(ガスパン遊び)を誘われたことがあるとした者は，男性 80 人(11.7%)，女性 75 人(26.1%)であった．

③ ブタン入手困難さ (表 36)

ブタンの入手が困難であるかどうかについて尋ねた．

簡単に手に入ると回答したのは，男性では 222 人(32.4%)，女性では 118 人(41.1%)であり，4 割前後の者がブタン入手は容易としていた．

④ ブタン乱用(ガスパン遊び)を知っていたか(表 37)

乱用以前よりブタン乱用(ガスパン遊び)ということばを知っていたかどうかを尋ねた．非乱用者には施設入所以前に知っていたかどうかを尋ねた．

もともと知らなかった者は，男性では 342 人(49.9%)，女性では 111 人(38.7%)であり，関心がなかったとした者が男性 214 人(31.2%)，女性では 110 人(38.3%)であった．一方，試してみたかったと関心を示した者が男性 46 人(6.7%)，女性では 31 人(10.8%)いた．

⑤ ブタン乱用開始年齢(表 38)

ブタン乱用開始年齢は，男性では 13 歳が 30 人(43.5%)と多かった．女性も 13 歳がいずれも 19

人(40.0%)で最も多かった.

⑥ ブタン乱用頻度(表 39)

ブタンを最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた.「ほとんど毎日」していた経験があるのは,男性 9 人(13.0%),女性 5 人(10.6%)であった.一方,「いままで 1,2 回」のみと回答した者は男性 20 人(29.0%),女性 19 人(40.4%)であった. ブタン乱用に関して乱用頻度のおおきな性差はないようであった.

⑦ ブタン乱用への態度(表 40,41)

男女ごとにブタン乱用経験別に比較した.ブタン乱用についてどう思うかを,「すべきではない」,「少々ならかまわないと思う」,「かまわないと思う」の 3 件法で回答してもらった.

「乱用すべきではない」と答えた者は,ブタン非乱用者では男性 256 人(42.3%),女性 82 人(35.3%)だったのに対し,乱用者では男性 9 人(13.0%)および女性 8 人(17.0%)と少なかった.非乱用者ではブタン吸引そのものを知らなかった者が男女それぞれ 253 人(41.8%),86 人(37.1%)と多かった.

⑧ ブタンの有害性知識(表 42,43)

ブタン吸引の影響として,精神病状態,急性中毒死について尋ねた.

非乱用者では,精神病状態および急性中毒死いずれも知らなかった者が男性 400 人(66.1%)女性 152 人(65.5%)と多くを占めていた.男性では,精神病症状について知っていた者は乱用者 29 人(42.0%)非乱用者 98 人(16.2%),急性中毒死について知っていた者は乱用者 16 人(23.2%)非乱用者 86 人(14.2%)であった.女性では,精神病症状について知っていた者は乱用者 21 人(44.7%)非乱用者 52 人(22.4%),急性中毒死について知っていた者は乱用者 18 人(38.3%)非乱用者 42 人(18.1%)であった.男女とも有害性の知識は乱用者と非乱用者の間に大きな差はないようであった.

⑨ ブタンで体験した症状(乱用者)(表 44)

乱用者において体験した症状を尋ねた.その結果ブタン乱用によって精神病状態を体験した者は男女それぞれ 12 人(17.4%),9 人(19.1%)であった.フラッシュバック体験率は男女それぞれ 13 人(18.8%),14 人(29.8%)であった .

⑩ ブタンの有害性知識と抑止(表 45)

ブタンの有害性知識がブタン吸引を抑止するかどうか検討するためブタンの有害性を知っていたら乱用しなかったかどうかを乱用者に尋ねた.男女とも害を知っていても「やはりしていたと思う」が多かった.男性では「やはりしていたと思う」37 人(53.6%)「害を知っていたら吸引しなかったと思う」16 人(23.2%),女性では「やはりしていたと思う」32 人(68.1%)「害を知っていたら吸引しなかったと思う」10 人(21.3%)であった.

⑪ 施設退所後、乱用しないと思うか(ブタン乱用者のみ) (表 46)

今回施設を退所した後ブタンを再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた.その結果,「多分やると思う」あるいは「絶対やると思う」と答えた者は男性では 4 人(5.7%),女性では 11 人(23.4%)であり,「絶対やらないと思う」は男女それぞれ 44 人(63.8%),26 人(55.3%)であった.退所後のブタン乱用への気持ちに性差はなく「絶対やらないと思う」「多分やらないと思う」と回答したものが多かった.

⑫ 退所後、乱用すると思う理由(「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表 47)

退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた.対象人数が男性 4 人女性 11 人と少なかった.退所後乱用すると思う理由として「誘わ

れたらやると思う」「なんとなくそう思う」などがやや多かった.

3) 大麻

① 周囲の大麻剤乱用による精神症状発現者(表48)

身近に大麻乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか尋ねた.

その結果，男性の 41 人(6.0%)，女性の 52 人(18.1%)が身近に大麻乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたと答えていた．大麻による周囲の精神症状発現者は女性に多かった.

② 大麻乱用の誘い(表 49)

大麻の使用を誘われたことがあるとした者は，男性 34 人(5.0%)，女性 51 人(17.8%)であった.

③ 大麻入手性困難さ(表 50)

大麻の入手が困難であるかどうかについて尋ねた.

簡単に手に入るとしたものは，男性では 37 人(5.4%)，女性では 49 人(17.1%)であり，女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった.

④ 大麻の知識(表 51)

「大麻を吸う前(使ったことがない人は施設入所前)，大麻についてあなたはどう思っていたか」を尋ねた.

関心がなかったとした者が男性 379 人(55.2%)女性 172 人(59.9%)と多かった．一方「見てみたかった」が男性 35 人(5.1%)女性 34 人(11.8%)，「試してみたかった」が男性 17 人(2.5%)女性 19 人(6.6%)であった.

⑤ 大麻の乱用開始年齢(表 52)

大麻乱用者に乱用開始年齢を尋ねた．男性では 6 人(42.9%)女性では 13 人(65.0%)が 13 歳から 14 歳が開始年齢と回答しており，この年代に開始年齢として多かった．男性では 10 歳以下と答えた者がいた.

⑥ 最もしていた時の大麻乱用頻度(表 53)

大麻乱用経験者に最も吸引していた時期の吸引頻度を尋ねた．「今まで 1，2 回」が男性では 4 人(28.6 %)女性では 10 人(50.0%)と多かった．また「数回以上」と答えた者も男性 5 人(35.7%)女性 5 人(25.0%)と多かった．女性では「ほとんど毎日」と答えた者が 1 人(5.0%)みられた.

⑦ 大麻乱用への法律知識(表 54)

大麻乱用者に対して，大麻乱用が法律で禁止されていることを知っているかどうか尋ねた．その結果，知っていた者は男性 13 人 (92.9%)，女性では 19 人(95.0%)でありほとんどの乱用者は禁止されていることを知っていた.

⑧ 大麻乱用への態度(表 55, 56)

大麻を吸うことをどう思っていたかを大麻乱用の有無で比較した．大麻非乱用者は，男性 510 人(77.4%)，女性 164 人(64.1%)が，「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えていた．一方，大麻乱用者では，「すべきではない」とした者が男女それぞれ 4 人(28.6%)，2 人(10.0%)に過ぎなかった．大麻乱用者では「少々ならかまわないと思う」「 それを守る必要は全然ない」をあわせた大麻乱用に肯定的意見が男性で 9 人(64.3%)，女性で 16 人(80.0%)を占めていた．男女とも乱用者のほうが許容的態度であった.

⑨ 大麻禁止への態度(表 57, 58)

法律で大麻を禁止していること自体への意見を尋ねた．有機溶剤乱用の場合と同様，非乱用者は，「禁止することを当然」とするものが多い(男性 443 人 67.2%，女性 144 人 56.3%)のに対し，大麻乱用者では「禁止することを当然」とした者は少なかった(男性 6 人 42.9%，女性 5 人 25.0%).

大麻乱用者では「大麻くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよい」など大麻吸引に肯定的意見が男女それぞれ2人14.2%，12人60.0%いた．

⑩ 大麻の有害性知識(表59,60)

大麻吸引の影響として，精神病状態，無動機症候群について尋ねた．全体に乱用者と非乱用者の間に差はなかった．精神病状態については乱用者は男女それぞれ6人(42.9%)10人(50.0%)，非乱用者では男女それぞれ242人(36.7%)123人(48.0%)が知っていた．

⑪ 大麻で体験した症状(乱用者)(表61)

乱用者に大麻による精神症状を尋ねた．精神病状態は男性5人(35.7%)，女性4人(20.0%)にみられた．無動機症候群は男性3人(21.4%)，女性6人(30.0%)にみられた．精神病状態は女性に多かった．

⑫ 大麻の有害性知識と抑止(表62)

大麻吸引の有害性の知識が大麻吸引を抑止するかどうかを検討するため，大麻による害を知っていたら吸引しなかったと思うかどうかを大麻乱用者に尋ねた．

「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と答えた大麻乱用者は，男女それぞれ0人(0.0%)，5人(25.0%)にすぎず，「やはりしていたと思う」と答えた者が男女それぞれ7人(50.0%)9人(45.5%)見られた．

⑬ 施設退所後の大麻使用(大麻乱用者のみ)(表63，表64)

今回施設を退所した後大麻を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた．その結果，男女ともほとんどの者が「多分やらないと思う」(男性3人(21.4%)，女性6人(30.0%))あるいは「絶対やらないと思う」(男性10人(71.4%)，女性9人(45.0%)と答えていた．

退所後も乱用する理由としては，「今もやりたいと思っているから」「誘われたらやると思うから」などがあげられた(表64)．

4) 覚せい剤

① 周囲の覚せい剤乱用による精神症状発現者(表65)

身近に覚せい剤乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた．

その結果，男性の31人(4.5%)，女性の57人(19.9%)が身近に覚せい剤乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたとしており，女性の周囲で覚せい剤乱用による精神症状発現者が多かった．

② 覚せい剤入手性(表66)

覚せい剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた．

簡単に手に入るとした者は，男性では30人(4.4%)，女性では42人(14.6%)，また少々苦労するが手に入ると答えた者が男性52人(7.6%)，女性52人(18.1%)であり，女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった．

③ 覚せい剤への関心(表67)

「覚せい剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)，覚せい剤についてどう思っていたか」を尋ねた．「見てみたかった」および「試してみたかった」という覚せい剤への関心を示した者が男性の39人(5.7%)，女性の49人(17.1%)を占めた．女性は男性よりも覚せい剤乱用以前から覚せい剤への関心が高かった．

④ 覚せい剤乱用への誘い(表68)

「入所前，覚せい剤の使用を誘われたことがあるかどうか」を尋ねた．男性では12人(1.7%)，女性では41人(14.3%)が覚せい剤乱用に誘われていた．この質問項目では無回答が男女それぞれ

216人(31.5)，53人(18.5%)と多いためその点を考慮する必要がある．

⑤ 覚せい剤の乱用開始年齢(表69)

覚せい剤乱用者にはじめて覚せい剤を乱用した年齢を尋ねた．男性では乱用者が5人と少ないので開始年齢についてははっきりしない．女性では11歳から14歳までだいたい3人(23.1%)ずつであった．

⑥ 覚せい剤の乱用頻度(表70)

覚せい剤乱用者が最も乱用していた時期にどの程度乱用していたかを尋ねた．男女とも「1，2回」「数回以上」で男女それぞれ2人(40.0%)および9人(69.2%)を占めた．「ほとんど毎日」とした者も男女それぞれ1人いた．

⑦ 覚せい剤の乱用方法（表71)

乱用方法を「吸引」「注射」「吸引と注射」に分けて尋ねた．吸引のみを乱用方法としてあげた者が女性では5人(38.5%)と最も多かった．古典的使用法である注射のみをあげた者は男女それぞれ1人(20.7%)，1人(7.7%)であった．「吸引と注射」をあげた者は，男女それぞれ1人(20.0%)，3人(23.1%)であった．

⑧ 覚せい剤への態度(表72,73)

男女別乱用経験別に覚せい剤への態度を比較した．男性では乱用者が少ないため乱用有無別の比較はあまり意味がない．男性では約80%が「乱用すべきではない」としている．男性乱用者では3人(60.0%)は「少々ならかまわない」と回答している．女性では乱用者13人のうち「少々ならかまわないと思う」3人(23.1%)「法律を守る必要は全然ない」4人(30.8%)など覚せい剤乱用に肯定的意見が多く「乱用すべきではない」は6人(46.2%)と少なかった．これに対し女性の非乱用者では「乱用すべきではない」が172人(65.6%)で2/3ほどを占めていた．

⑨ 覚せい剤禁止への態度(表74,75)

法律で覚せい剤を禁止していること自体への意見を尋ねた．男性では「禁止するのは当然である」とする者がおよそ70%であった．女性では乱用者では「禁止するのは当然である」は5人(38.5%)、「そもそも法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよい」という覚せい剤使用に肯定的意見が5人(38.5%)にみられた．一方，女性の非乱用者では「禁止するのは当然である」が151人(57.6%)であった．

⑩ 覚せい剤の有害性知識(表76,77)

覚せい剤吸引の影響として，精神病状態およびフラッシュバックについて尋ねた．男性では精神病状態およびフラッシュバックについて知っているとした者が40%ほどであった．一方，女性では精神病状態やフラッシュバックについては知っている者は乱用者でいずれも80%ほどであり，非乱用者でも50%ほどが有害性の知識があった．

⑪ 覚せい剤の有害性体験率(表78)

覚せい剤乱用者に，精神病状態，フラッシュバックの体験ついて尋ねた．男性では，精神病状態の経験が2人(40.0%)，フラッシュバックの体験した者はいなかった．一方，女性では，精神病状態，フラッシュバックの体験した者はそれぞれ4人(30.8%)いた．

⑫ 覚せい剤の有害性知識と抑止(表79)

覚せい剤有害性知識が覚せい剤吸引を抑止するかどうかを覚せい剤乱用者に尋ねた．男性では「やはりしていたと思う」「害を知っていたら吸引しなかったと思う」がそれぞれ1人(20.0%)2人(40.0%)であった．女性では「やはりしていたと思う」6人(46.2%)「害を知っていたら吸引しなかったと思う」3人(23.1%)であった．．

⑬ 施設退所後の乱用可能性(覚せい剤乱用者のみ)(表 80)

今回施設を退所した後覚せい剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた．その結果，「絶対やらないと思う」と答えたものは男女それぞれ 2 人(40.0%)9 人(69.2%)であった．だんせいでは 1 人が「絶対やると思う」，女性では 2 人が「多分やると思う」と答えていた．理由については，「今もやりたいと思っているから」「いやなことがあったらやると思うから」「誘われたらやると思うから」「なんとなくそう思うから」のいずれもがあげられていた(表 81)．

D考察

1 本年度調査の薬物乱用実態

1) 乱用薬物の種類

今年度の調査で，非行児の乱用薬物として多かったのは男性ではブタン 69 人(10.1%)および有機溶剤 31 人(4.5%)，抗不安薬(安定剤)乱用 31 人(4.5%)，女性では有機溶剤 61 人(21.3%)，ブタン 45 人(16.4%)，抗不安薬(安定剤)乱用 45 人(15.7%)であった．

また今回新たに調査対象薬物としたいわゆる脱法ハーブは男女それぞれ 25 人(3.6%)および 23 人(8.0%)に認められ比較的頻度の高いものであった．いわゆる脱法ハーブの使用が今後も続くのか継続的に調査をしていく必要がある．

これまでの入所非行児調査では男女とも有機溶剤が最も多い乱用薬物であったが，2006 年調査以降は男性では有機溶剤乱用よりもブタン乱用の方が多くなっている．また医療薬である抗不安薬の乱用が，男女とも比較的多く認められるようになってきている．

薬物乱用で検挙された少年数は近年減少している．特に有機溶剤乱用は 1990 年頃には 2 万人以上が検挙されていたが，その後急激に減少していき 1994 年に 1 万人以下となり 2006 年には 1000 人以下と大きく減少している．2011 年には少年の送致件数は 100 人となった．

一方ブタン乱用者数は十分な資料がないためはっきりしないが，われわれの調査からは有機溶剤乱用よりも多いことが疑われる．現在ブタン乱用は青少年の間で相対的に重要な乱用薬物となってきていると思われる．

また医薬品である抗不安薬の乱用が男性 31 人(4.5%)女性 45 人(15.7%)と比較的多く認められている．青少年の乱用薬物としてブタンと並びあまり重要視されていないが頻度の高い乱用薬物として注意する必要がある．有機溶剤乱用が急減してきたためブタンや抗不安薬が相対的に頻度が高くなり，実態については今後とも把握していく必要がある．これまで抗不安薬については「いわゆる精神安定剤」として質問してきたが具体的薬物名を聞くなど質問方法の変更も考えられる．

また医薬品として以前より使用されていた咳止め液(ブロン液など)も乱用薬物としてまだ時々みられる．

男性においてその他の薬物乱用頻度は 1%台以下である．この値は未回答者の頻度と変わらずこれらの薬物乱用頻度は信頼性が低いと考えられる．

全体的に薬物乱用が減少してきているため，特に男性では児童自立支援における薬物問題の重要性は相対的に低下していると考えられる．そのため薬物に対する啓蒙教育があまり行われなくなるではないかと心配される．

2) 薬物乱用の性差

入所非行児の薬物乱用の性差については，従来と同様にすべての薬物において男性より女性の方が乱用率が高くまた乱用者実数も多かった．一方，警察庁統計によれば[9]，有機溶剤乱用，大麻乱用，覚せい剤乱用により検挙された犯罪少年のうち女性の割合はそれぞれ 40.0%，24.7%，62.8%である．つまり大麻のみ著しく男性に多く，有機